

【日本の大学】第93回——愛媛大学：学生中心掲げる四国の総合大学

愛媛大学は、四国・愛媛県の県庁所在地松山市に本部を置く国立大学である。県内の旧制高校や専門学校4校を母体に1949年に設立された。現在は、法文学部、教育学部、社会共創学部、理学部、医学部、工学部、農学部の計7学部、大学院6研究科、2学環からなり、学生数は約1万人を擁する四国で最大の総合大学となっている。

大学では、その使命として「自ら学び、考え、実践する能力と次代を担う誇りを持つ人間性豊かな人材を社会に輩出すること」を掲げている。相互に尊重し啓発しあう人間関係を基調として「学生中心の大学」「地域とともに輝く大学」「世界とつながる大学」を創造することを基本理念としている。



大学正門

文理、教育、工学部でスタート

以下、愛媛大学のホームページなどから大学の沿革と現状を見ていこう。

設立時、文理学部、教育学部、工学部の3学部で発足した。文理学部は旧制の松山高等学校を引き継ぎ、教育学部は愛媛師範学校と愛媛青年師範学校を受け継いだ。工学部は、新居

浜工業専門学校からつながっている。

文理学部は人文学科と理学科の2学科だったが、1968年には改組されて法文学部（法学科、文学科）、理学部、教養部（1996年に廃止）が置かれた。このうち、法文学部は、法学科に夜間主コースの設置（1979年）、法文学部の学科に経済学科を設置（1981年）、経済学科や文学科に夜間主コースの設置（1981、83年）などの改革が実施された。

1996年には、法文学部の3学科を改組して、総合政策学科（5コース）と人文学科（3大学科目）の2学科となり、それぞれの学科の内容も充実、改変が行われた。2016年には、2学科が改組されて、人文社会学科の1学科（3コース）となっている。コースは、法学・政策学履修コース、グローバル・スタディーズ履修コース、人文学履修コースの3コースで、学生は1年次の終了時点でどのコースを専攻するのかを決める。文系の総合学部として、社会科学から人文科学まで幅広く学べる場を提供している。

教育学部は大学発足時からある学部で、その後、教育専攻科（音楽専攻）の設置、聾学校教員養成課程設置、養護学校教員養成課程、幼稚園教員養成課程など、新しい分野の増設や拡充が行われてきた。2020年にはそれらの養成課程を網羅し、教育課程を学校教育教員養成課程に一本化し、地域のニーズにより応え得る組織に改編した。現在、初等教育コース（幼年教育サブコース、小学校サブコース）、中等教育コース、特別支援教育コースの3コースからなっている。2024年度からは、教育発達実践コース（幼年教育サブコース、小学校教育サブコース、特別支援教育サブコース）と初等中等教科コース（言語社会教育サブコース、科学教育サブコース、生活健康・芸術教育サブコース）の構成を変更することになっている。



教育学部

工学部は1939年に発足した新居浜高等工業学校（1944年に新居浜工業専門学校の改称）を引き継いでできた学部である。機械工学科、電気工学科、鉱山学科、冶金学科でスタートし、その後新たな学科の追加や、改組が実施されたあと、2019年には1学科の4分野9コースへと改変されている。機械・システム分野としては、機械工学コースと知能システム学コースの2コース、電気・情報分野としては、電気電子工学コース、コンピュータ科学コースと応用情報工学コースの3コース（2024年度からはデジタル情報人材育成特別プログラムが加わる予定）、材料・化学分野としては、化学・生命科学コースと材料デザイン工学コースの2コース、土木・環境分野としては、社会基盤工学コースと社会デザインコースの2コースの計9コースからなっている

刻々と変化する産業構造に柔軟に対応するための広範な知識を修得し、工学系基礎力と創造性を兼ね備えた理工系人材の育成を目的としている。1年次には工学科共通の科目を学び、2年次からコースごとに専門性を高める。



工学部

県立農科大を移管

農学部ができたのは1954年である。1900年に設立された愛媛県農業学校が大戦後の1949年に県立松山農科大学となっていたのを、国立の愛媛大学に移管することによって誕生した。移管当初は、農学科、林学科、農業工学科、農芸化学科、総合農学科の5学科であった。附属研究農場、附属演習林も同時に移管された。

その後、大学院（修士課程）の設置（1967年）、学科の改称や増設が続いた後、1988年には、生物資源学科の1学科8大講座へと再編成された。講座はその後、何度かの改変を実施した後、2016年には、生物資源学科1学科を、3学科（食料生産学科、生命機能学科、生物環境学科）に改組した。食料生産学科には、3コース（農業生産学コース、植物工場システム学コース、食料生産経営学コース）と知的食料生産科学特別コース（6年一貫）を、生命機能学科には応用生命化学コースと6年一貫の健康機能栄養科学特別コースを、さらに生物環境学科には、森林資源学コース、地域環境工学コース、環境保全学コースの3コースと6年一貫の水資源再生科学特別コースを、それぞれ設置した。これに伴い、大学院の専攻科の改組も実施した。農学部では、県内に学部や大学の様々な実習、実験施設を保有しており、そこで多くの体験、学習ができることや、現場でのインターンシップを充実させていることが特色となっている。



農学部会館（樽味地区）

理学科は、1968年に発足時には数学科、物理学科、化学科、生物学科であったが、1977年に地球科学科が加わったほか、何度かの組織改正が実施された後、2019年の改正によって理学科1学科の中に、数学・数理情報、物理学、化学、生物学、地学の五つのコースとな

っている。大学院は工学系と合わせた理工学研究科が組織されている。

1 学科に改組したことについて、(1) 基礎学力の確立と科学に対する俯瞰力が涵養できること(2) 五つの理学基幹分野に対応する教育コースによって体系的な専門性と基盤スキルの獲得ができること(3) カリキュラムの柔軟性と履修プログラムの組み合わせで、科学で未来を拓く力をつけることができる――などと説明している。

医学部は 1973 年に設置された。基本理念である「患者から学び、患者に還元する教育・研究・医療」のもとで、1976 年に附属病院を開設、79 年には大学院医学研究科、94 年には看護学科、98 年に看護学専攻を設けて、地域医療に貢献してきた。これまで、6 千人以上の医療人を輩出している。



医学部

地域の持続可能な発展目指す

7 番目の学部として社会共創学部が設置されたのは 2016 年である。様々な地域社会の持続可能な発展のために、地域の人たちと協働しながら、課題解決策を企画・立案することが

でき、地域社会の価値創造へと導く力を備えた人材を育成する。文系・理系に分かれた学びではなく、学部内の様々な学科・コースが展開するカリキュラムを通じて、文系・理系の両方から社会共創の基礎となる知識や理論を学ぶ。

学科は、産業マネジメント学科、産業イノベーション学科、環境デザイン学科、地域資源マネジメント学科の四つを設けており、各学科において問題意識を持ち、知の統合を図り、地域社会を導く力を培っていく。

大学は、松山市内に3か所、東温市に1か所の計4か所のキャンパスがある。本部のある松山市城北キャンパスには法文学部、教育学部、社会共創学部、理学部、工学部の建物、施設が集まっている。松山市重信地区には医学部、医学部附属病院など医学部関連の施設があり、樽味地区には農学部、附属高等学校などの施設がある。松山市に隣接する東温市の持田地区には附属幼稚園、小中学校、特別支援学校などの校舎がある。



社会共創学部

国際交流の関係では、留学生と日本人学生が共に行動し、語り合えることができ、勉学に専念できる環境設備づくりとして、日本人学生による日本語学習支援ボランティアや国際

交流コーディネーターなどで外国人留学生の学習・生活環境をバックアップしている。

日本語以外の言語による支援も行っており、英語によるカウンセリング、総合健康センターでは英語、中国語による情報提供、留学生に関わる学内の書籍は英語、中国語で提供している。日本語学習を奨励しており、総合的な日本語教育を提供している。国際教育支援センターが提供している授業は、城北キャンパス、オンラインで開講している。定期、サバイバル、予備教育の3コースがある。勉強だけでなく、生活を楽しんでもらうためにも大切なのが地域との交流。国際連携推進機構から、留学生を地域の小・中学校へ派遣して、留学生の母国の言葉や文化について話してもらう学校訪問やホームステイなども行っている。

研究分野では、世界のトップにランクされる三つの研究センター（沿岸環境科学研究センター、地球深部ダイナミクス研究センター、プロテオサイエンスセンター）を中心として、学術研究成果を還元する取り組みによって国際貢献・国際連携を積極的に行っている。



南加記念ホール

外国人研究者は、教員、研究員など 59 人を受け入れている。留学生は学部学生、大学院学生、研究生など計 187 人である。（2023 年 5 月現在）

学生数は学部生が 7929（うち女性 3275）人、大学院生が 1173（うち女性 342）人、教員数は、886 人（うち女性は 206 人）である。（以上 2023 年 5 月現在）

現在の学長は仁科弘重氏である。東京大学農学部農業工学科卒、同大学院農学系研究科農業工学専門課程修士課程修了。農学博士。東京大学農学部助手、愛媛大学農学部助教授、同教授。2011 年に愛媛大学農学部長、2012 年、愛媛大学植物工場研究センター長、2015 年愛媛大学理事・副学長などを経て 2021 年 4 月から現職。専門は農業環境工学、植物工場。

日文：滝川 進

写真：愛媛大学 FaceBook & HP